

<資料紹介>

『靈交』にあとがきを記す。(10完)

——香川県大島の療養所をあらわす点描——

「『靈交』にあとがきを記す。」(1)『彦根論叢』第378号(2009年5月)掲載

同(2)『彦根論叢』第379号(同年7月)掲載

同(3)『彦根論叢』第380号(同年9月)掲載

同(4)『滋賀大学経済学部研究年報』第16巻(同年11月)掲載

同(5)『彦根論叢』第384号(2010年夏号6月)掲載

同(6)『彦根論叢』第385号(同年秋号9月)掲載

同(7)『滋賀大学経済学部研究年報』第17巻(同年11月)掲載

同(8)滋賀大学経済学部 Working Paper Series No.150(2011年7月)

同(9)滋賀大学経済学部 Working Paper Series No. 153(2011年8月)

阿部 安成

続々穂波の猛筆 1940年も長田穂波の猛筆は依然健在で、なおいっそうその勢いを増してゆく観すらあった。前回とおなじくその執筆ぶりをあげておこう。第254号「年頭之辞」(長田穂波、1段)「聖書余談」(ほなみ生、4段)「随筆物置道場」(おさだ生、3段)「うた／即吟／詩」(ホナミ生、半段)「新年もこれだ」(穂波生、1段)「感想宗教と科学」(*、1段)。第255号「新しき歌をうたへ」(*、5段)「聖書余談」(ほなみ生、3段)「会計表を見ての感」(穂波生、1段)。第256号「社説新郎の友」(*、1段)「聖書余談(マルコ二章)」(*、4段)「うた／松の小鳥／俳句」(ほなみ生、半段)「せまき門」(*、1段)。第257号「永遠の人生観」(長田穂波、5段)「オー栄光者！」(ほなみ生、7行)「聖書余談(マルコ二〇二三—三〇六)」(*、2段)「平等のた

まもの」(おさた生、1段)「子心の刹那のこゑ」(ほなみ生、7行)「満支伝道を祈る」(穂波生、半段)。第258号「聖霊」(長田穂波、1段)「確かな御存在です」(穂波生、4段)〔詩〕(穂波、5行)「みたまの力」(穂波生、2段)「うた・俳句／新入所者／春暁／五旬節／友は逝く」(ホナミ生、半段)「リバイバル」(穂波生、1.5段)。第259号「われは光なり」(長田穂波、1段)「聖書余談(マルコ三〇七—一九)」(*、4段)「菊池姉に」(穂波生、2段)「人の光りなり」(穂波生、2段)「完勝を祈る」(おさだ生、半段)。第260号「哀歌」(長田穂波、1段)「聖書余談(マルコ四〇)」(穂波生、4段)「うた／返歌」(穂波生、4行)「噫山本静雄兄」(*、2段)「寸鉄」(おさだ生、10行)「山本兄の葬式感話」(穂波生、1段)「短歌四人集／子心」(おさだほなみ、6行)「自然」(ホナミ生、7行)。第261号「永勝の原理」(長田穂波、4行)「霊交会代表者」(穂波生、半段)「田中博士歓迎席上感話」(おさだ生、2段)「三人歌集／友に送れる」(ほなみ生、5行)「最近医界方面のトピック」(穂波生、1段)「真剣は開く」(ほなみ生、1段)。第262号「義は国を高くす」(長田穂波、5段)「聖書余談」(穂波生、3段)「うた／黙禱」(穂波生、8行)「夏の日」(ほなみ生、1段)「信仰」(おさだ生、1段)。第263号「祈りの一致」(長田穂波、1段)「信仰上の話題」(穂波生、4段)「洗礼」(ほなみ生、1段)「詩集病床の祝祭を読む」(穂波生、1段)「聖書余談」(*、2.5段)。第264号「永生の感覚」(長田穂波、1段)「祝霊交式百六拾四号発行」(編輯室、1段)「瞑想断片」(穂波生、3段)「おもりゆく病ひにも」(ほなみ生、1段)「輝けるもの」(穂波生、半段)「国防と救癩問題」(ほなみ生、1段)。第265号「祝降誕節」(穂波生、1段)「大島SS校」(ほなみ生、半段)「大島日曜学校の歌」(穂波作、1段)「うた／祝降誕節」(おさだ・ほなみ、6行)「映画小島の春を観る」(おさだ生、1段)「エリクソン師を送る」(穂波生、半段)。『霊交附録』「廃刊之辞」(編輯人、1段)「恩寵の記」(穂波生、1段)「新春迎志」(ほなみ生、3行)「瞑想と祈禱」(ほなみ生、1.5段)——これに毎号の巻頭言「セ、ラギ」と巻末の「編輯後記」がくわわる極めて達者なペンである(*は執筆者の署名がないが穂波によるとおもわれる稿に付した。〔 〕は

阿部による表記をあらわす)。

まさに穂波のひとりほしいままの独擅場だといってよい『靈交』紙面の構成は、すでに別稿にも記したとおり、それは穂波の誇るどころではなく、むしろ、そうみられることをかねてより気にしていたようすがうかがえる。穂波の配慮は、「靈交誌も個人のものでなく、会の事業の一つでございます」（「附記」R:238_38）との記述にあらわれ、また、「会の雑誌か、穂波の個人雑誌か、それは何れでもよい、只神に栄光あれ、人に幸福あれの祈一つでかためたい」（「編輯後記」R:185_34）とは、そうしたところ配りすら必要と感じなかったころの穏やかな心情を、いや、あるいは、いっそう強烈な、穂波のもとにも伝わった事実誤認への、異議申し立てだったのかもしれない。

ときに『靈交』をわが子のごとく喻えた穂波による、『靈交』との距離のとりようである。こののち穂波は『靈交』を、「ブキヤウな娘」とあらわすこととなる（後述）。

執筆の場所 穂波は『靈交』1940年1月発行号に「物置道場」と題した随筆を寄せて、自分の仕事場を紹介した（「随筆物置道場」R:254_40）。

三木人事部長の好意によりて借用をゆるされたる物置部屋の片隅に引越して数ヶ月となる。この六畳敷の一室は、自分にとりて有難い「道場」であります。新年も幾月か此室で暮すであらう故に一寸記して見ませう……。

と披露された部屋は穂波の個室ではなく、碁盤や将棋盤を囲む人びともいる「一寸した娯楽室の観」がする6畳の空間だった。すでに前年12月発行分の「編輯後記」（R:253_39）にも、「私の現在机を置かして貰って居ます部屋は終日……蚊が出て居ます」と記していたとおり、そのころから穂波はここを作業部屋としていた。ここでの執筆はそう長くは続かず、1940年の6月発行号で、「穂波は「物置道場」を這出して共同生活の室へ移りました」と告げることとなる（「編輯後記」R:259_40）。

この道場退去を記した「編輯後記」のおなじ項で、穂波は、「友松円諦さんの「真理」誌上に東京の北条、九州の尺草、長島の明石、それに穂波を加へて、日本癡者の四天王と数へてあるとの噂を承りました」と記した。この記事についてはべつの機会に述

べたのでここではそれをくりかえさず¹⁾、つぎの2点だけを確認しておこう。

1つは、穂波の執筆の位置。さきの『真理』誌上で穂波は、北条民雄、島田尺草、明石海人とならぶ、正確な引用をすると、「癩文学の四高峰」のひとりとしてとりあげられていた。いまは忘れられてしまった穂波のかつての評価を、そしてそれが穂波自身のもとへ届いていたことを、ここにあらためて確認しておこう。もう1つは、こうした評価をうけながらも、その一方で、数多くいる療養者の代表にまつりあげられてしまうことへの穂波自身の躊躇の表明を確かめておこう。

立派な教養ある人格者も多く居られますが、一身上の都合で黙して表面に出られません。四天王が癩者の偉い方面の代表では決してありません。との但し書きには、誉められたことへの照れの面映ゆさではなく、拒否とまではゆかないにしても、称讃への確かな違和があらわされていたとみえる。

穂波はおそらく期せずして、「編輯後記」の同じ項で、退室することとなった執筆の場所と、療養所外部からの評価による自分の著述の「癩文学」における場所とを記載することとなった。

穂波への評価の高さはともかくも、このときの彼はペンを執ることで、「徒食」者による国への返報を実行しようと努めたのだった。「ペン報国」の実践である（「編輯後記」R:258_40、同R:264_40）。

信仰と愛国 穂波のペンは、時局をかたちづくっている戦争を「聖戦」とあらわして、戦時を記す文体を世俗の秩序に重ねあわせてゆく（「セ、ラギ」R:255_40など）。戦時という時局認識は、現時が「地上は現やサタンの支配下」にあるとの危機意識と連動している（「編輯後記」R:254_40）。やがて日本政府が「大東亜戦争」と命名することとなる「聖戦」とは、「サタンの秩序にいどむ」戦いでもあった（前掲「セ、ラギ」R:255）。

穂波はむやみやたらと戦争を好んだのではない。戦争を避け得ないと知ることと、

¹⁾ 阿部安成「史料紹介 長田穂波の痕跡－療養所の生のあらわし方」（『ハンセン病市民学会年報2008』2009年）を参照。

平和を希求することとのあいだに「大矛盾」がある、「本来人間は戦争を好んでみないのであるが、それで戦はざるを得ない」というところに「大きな間違ひがある」との考えを記す。戦争をめぐる認識に大きな矛盾や間違ひがあるとわかったうえで、「国家の存亡、民族の興廃と言ふ如き道理」において、「戦争も正当」だといわなくてはならない、と穂波は唱えたのだった（ただしここではもう1つ、戦争は「地上」における「悪魔のワナ」と「人間低級のバクロ」なのだと述べている）。サタンとの戦いであり、かつ、国家と民族の興亡をかけた戦いであれば、「愛する祖国日本」のおこなう戦争を、穂波は肯う。「我は必ずしも戦争を否定せない」、「神のために戦ふ」との決心をみせたのである（「新しき歌をうたへ」R:255_40）。

その穂波は自問をくりかえす。「新しき歌をうたへ」の稿が載る『靈交』の「編輯後記」において、

「新しい歌を唄へ」は、基督者の時局に対する祈りであり、忠君愛国の道として更に戦争参加の根本原理と信じて記して見ました。これには賛否両論の有ることを思つてゐます。

とみずからの稿を解説し、心中を開いてみせた。戦争を支え、戦争遂行の呼号に同調するとみえる穂波は、そうした自らを問うことを手放しはしていない。

穂波の煩悶の深浅や強弱や濃淡はもっとていねいにたどられなくてはならないが、ひとまず、『靈交』紙上の文言をとりあげると、そこで穂波は、「強国日本、一等国日本、東洋の盟主として祖国を愛します！」との「熱禱」を国家と神に捧げ（「編輯後記」R:229_37）、「国をこぞりての総力戦だ、我らも十分に覚悟してゐる、最後迄祈りつゝ頑張るぞ」（「編輯後記」R:255_40）との決意をみせたのだった。

菌と肉体と 癩=ハンセン病をめぐる療養所の歴史がこれまでどのように記されてきたか——唐突にみえる展開だろうが、あらためてここでかんたんにふれておくと、従来の研究やルポルタージュ、ドキュメンタリーでは、過酷で悲惨な療養所生活を強いる抑圧と、それへの抵抗や闘争としての運動とを軸として療養所と療養者の歴史を

描いてきたとみえる。戦争あるいは戦時が隔離を推進し、かつ物資不足などがさらに療養者を困窮させたとの記述が既存の文献にあふれている。他方で、療養者もまた療養所において戦争を支えるべく戦時を生きたことは、ほとんど記されてこなかった²⁾。戦時下の療養所のようすを明らかにしようとする試みは、なにも当時の療養者たちを糾弾することを目的としていない。わたしにとってそうした作業は、たんに、あったことを記そうとする仕事であり、また、療養所における戦時という療養者の生^{せい}をきちんと考えてゆくための準備だと考えている。

さて、では療養所での戦時という療養者の生は、なにだったのか。それを考える1つの手がかりを、つぎの文章にみるとしよう。

毎日大争闘であります。こゝもと平和どころか「剣なんぢの心を突き貫くべし」であります。穂波の肉を神とサタンとの一大争奪戦が行はれてみます。否、穂波のみでない凡ての肉体が一大争奪の修羅場なのでせう（「編輯後記」R:253_39）

——ここでは、病む自己の肉体が「神とサタンとの一大争奪戦」の場にとらえられている³⁾。さきにみたとおり、穂波は現時の戦争をサタンとの戦いと重ねあわせてみている。病む肉体はまた、もう1つの戦場としてあったのである。かつての穂波のレトリックにあった、「体毒が吹き、サタンが伝染して恐ろしくカサだらけの児を愛撫する事、母の如しである、斯の母と子が救主と私とである」（穂波生「そくばくの記」R:216_36。傍点原文）をみれば、穂波たちにとって自分たちの病はまさにサタンの「伝染」でもあったというのだ。サタンとの戦場がみずからの肉のうちにも現実世界にもあるとの観点からすれば、現世の戦争を否定するわけにはゆくまい。

「生命のドン底より湧く神の理想に生きる」というほどの劣位からの奮起を、「キリスト者の尊皇愛国」に連結し（おさだ生「完勝を祈る」R:259_40）、かつ「祖国浄化」

²⁾ こうした叙述について、阿部安成「癩と時局と書きものを一香川県大島の療養所での1940年代を軸とする」（黒川みどり編『近代日本の「他者」と向き合う』部落解放・人権研究所、2010年）で試みた。本小文はさきに発表したその試論の追補でもある。

³⁾ つづく文章で、「穂波のみでない凡ての肉体が一大争奪の修羅場なのでせう」と記しているのでここでの考察の対象は病者だけではないのかもしれない。要検討。

「健康日本」（「編輯後記」R:229_37、同前 R:259_40）の語で行動の指針と課題を、療養所内で発行するメディアから人びとに知らせようとするこのとき、療養者の生が戦争遂行と同調した、との見通しをわたしは持っている。

みずからを「癩病人と言ふ小さき自己」（長田穂波「随筆」R:243_39）、「国家の時局益々困難、物資配給不足の今日、社会のために申訳なき存在」（「編輯後記」R:258_40）、また、「癩菌の為めに倒されて無用の長物化しつゝある者」（ほなみ生「国防と救癩問題」R:264_40）とみるものたちにとって、その劣位から脱却するためにはまず、「私共は自分自身を浄化いたしまして、自己建設をいたす事が第一条件」なのだと唱え、そのうえで、「療に在りて何かイサ、カのテガラでも勝ち得て、それを神と皇上とに捧げやうでは有りませんか……！」との呼びかけをみせることとなる（前掲長田穂波「随筆」R:243）。これが彼ら彼女たちなりの「滅私報国」なのであった（前掲ほなみ生「国防と救癩問題」R:264）。

浄化という報国 では、「自己浄化」や「自己建設」がどのようにして「滅私報国」にいたるのか？、べつにいえば、「自己浄化」を「祖国浄化」へとつなげる手立てはなにか、あるいは、「救癩問題」を「国防」や「愛国運動」にどのようにつなげるかが、穂波たち療養者にとっての課題となる。

たとえば、穂波は自著発刊の広告において、「愛する祖国浄化の一念、日本民族の血の苦悩を拭ふと言ふ事は決して軽い問題ではない」（「広告」R:240_38）と述べた。自己と祖国の「浄化」とは「血の苦悩」とも喩えられる問題だった。それほどに深刻な重大事をどのように決着させようとするのか？、小さく無用なものだとも自覚するものたちに始末をつける方途があるのか？

その手立てを穂波は、隔離という自分たちに強いられた境遇を逆手にとって指し示した——「こゝに〔療養所に〕入所して〔中略〕散菌行為を為さざるは、期せずして愛国行為となる訳」だと唱えたのだった（前掲ほなみ生「国防と救癩問題」）。穂波の主張は、喝破というには足りない小声による伝達に聞こえてしまう。それというのも、

すぐにつづけて「これは誇るべきではないが、日本人として深く自覚すべきと思ふ」と補足しているからだ。これは、劣位にあるものたちが「日本人」と自己を定めるとき、自分たちにも可能な、同胞としての精一杯の役割を果すことにより、われわれも「日本人」なのだとの自覚を自分以外のものたちにむけた唱和の呼びかけであり、またもう1つに、自分たちは隔離という、ひとに強いられる最大の制約を受容し、自分たちが感染した伝染病をひとにうつさず、ほかの人びとを病ませない規律を固く遵守していると、療養所内から外部の「日本人」にむけて発せられた小さな、しかし鋭角に尖った刺すような宣告でもあったのだ⁴⁾。「健康日本」を建設するには、「徹底的に収容力の拡張」をして、「癩者は療養所以外では見られない程にせねば」（「編輯後記」R:259_40）と強度の隔離をもとめる療養者自身の訴えは⁵⁾、さきにわたしが小声の呼号とよんだ主張とひと連なりになっている。

こうした隔離による伝染の予防を遂行しているとの自覚は、療養者自身にとっても「慰め」となるという——「療養所に居て癩根絶を希ふ生活を思ふて、いさゝか慰めて居ります（流浪して菌を散布せない点を）。社会にむかってみずからを「申訳なき存在」と陳謝するとき、療養所内に隔離されることで菌を散布させず、したがって病を伝染させないという貢献をしているのだ、とみずからに説ききかせることがまた自分にとっての慰めになり、そうした自恃を梃子にして「一層に祈りに精進して皆様の御活動の伏兵たらむ事をと願つて止」まないと、戦地で戦うことができない銃後の、かつ不自由な病んだ身が、戦争を担う「伏兵」となるための、彼らなりの術がみせられたのだった。

こうした祖国浄化を可能とする方途として隔離を意味あるものとし、かつそれを得心しようとする穂波のもとには、外部からの「訪問者」の声も届いていたようだ——

4) つづく文章が、「斯の自覚たるや、療養所内外に及ぼす影響の如何に大にして美しきものあるや計り難いものがある。我らに言はしむれば全国の癩者にこの自覚ありや」となっているので、この主張のおもな宛て先は病友の療養者なのだろう。要検討。

5) つづく文章は、徹底した収容力増強よりは「療養所の内部機構や他の方面に改善する点」への援助が望ましいとなっている。強度の隔離収容の実現性は低かっただろうから、そうした事態と照らした議論が必要となる。要検討。

療養所での「安定した」生活を「結構な事である」とか「君らは衛生の兵隊である」とか「こんな島に黙々と生活する事は国家浄化に大なる貢献である」との慰めや称讃のことばである。そうした言を聞けば、「そんな意義にも感じられもするに……皇室の御仁慈の前に涙を流して何か御奉公をともしられる」その一方で、「決して明るい気持ちになれなかつた」とも率直なこころのうちも明かしている（穂波生「人の光りなり」R:259_40）。

隔離の意義を納得するには、自己の肉体についての菌の伝染力が強く、それに感染したために隔離されるものの員数が歴大でなくてはならない。伝染力についていうと穂波はまた、「救癩問題が社会の耳目たる新聞雑誌に取上げられ出した」昨今、「インテリ階級の中に「癩恐怖病」と言ふのが流行しかけて居るとの噂ですが、癩は伝染だと申ましても人間の体内には殺菌力が相当に備へて下すつて有りますから、それと癩菌は弱いことから御自分の体力を強くすれば！」との見解を述べていた（「編輯後記」R:249_39）。癩そしてハンセン病についてのいわゆる正しい知識の一端は、予防法のもとで隔離された療養者にも伝わっていたのである。

体力を強くしさえすれば「癩恐怖病」に罹ることはない——これをもっとすすめてゆくと、強い体力は癩をはねのける、体力を強化して癩に罹るな、という伝染病予防の地平を展望できるかもしれない。そこでは隔離という国土浄化の手段はその有効性が問われることとなり、したがって、戦時において病を生きることに見出された意義もまた薄れてしまうかもしれない。

それはともかくも、よりいっそうの検討が必要となるが、いま乱暴に議論の展望を述べておくと、戦争は癩予防法のもとでの療養所で暮らす療養者たちに、その生の意味をかいまみせたとなろう。もとよりその意味が、療養所内外の多くの人びとに共有され、療養者の生を安定させたとはいえない。戦争の見方や戦争への関与の仕方が療養者の生の意味をかたちづくり、また、療養所に生きるものたちがみずからの生をどのように斟酌するかが、時局としての戦争へのむきあい方を定めることとなったと、

ひとまず述べておこう。

ブキヤウな娘 戦時に同調する穂波はしかし、時局柄その言辞が規制をうけることとなる。『靈交』第256号(1940年3月)の「編輯後記」に、「二月号に妙なことを申し、又本号にも妙なことを申します」と彼みずからが記した。つづく文章は、「しかし今程キリスト教の純粹点である根本生命を検討して混入物を取り去るべき必要な時はありません。日本に於けるキリスト教の危機にあると思はれます」となっている(「キリスト」は原文ではゴシック体)。信仰に照らして戦争を否定し得ない穂波は、それとはべつに、「日本に於けるキリスト教の危機」を感じとり、述べるべきことを『靈交』紙上から発信していた。それを「妙なこと」といわざるを得ない時局が、穂波が「ペン報国」に邁進する場だった。「妙なこと」とはなにか。おそらく、第256号紙上では「せまき門」(無署名)と題された稿の冒頭、

近頃は「日本の教会の行衛」と言ふ事が案じられる。神学上及思想上よりの問題でなく、政治上より迫られし処によるとすれば、一層に憂慮すべきだと思ふ、伝道の難易を人数の上に置く処に方向転換せざるを得ないのも事実、更に時局に処して矛盾を感じずる点がありて、其調和に苦心をも要するらしい。そして現在程キリスト教と日本精神との関係を考へざるゝ時も尠い……!

——政治の圧迫によって「日本の教会の行衛」が案じられることを憂慮すると書いてしまった点、「時局に処して矛盾を感じずる点がある(その中身がなんであれ)」という記述、これらを「妙なこと」と自覚しているというのではないか。もとより穂波は、「愛民愛国は我れなりと叫ぶ」と自負をみせる。だがそれとともに、「夢の世、果しなき戦ひ、あくなき征服慾の国家に於て無力なる」と記してしまうところが(「新しき歌をうたへ」R:255_40。2月号)、彼がいくらかの警戒を示す、「妙なこと」にかかわるのではないか。

第255号(2月号)、第256号(3月号)ときてそのつぎの第257号(4月号)紙上で、「靈交誌よ、お前は誠にブキヤウな娘であるが、行けよ、世の悩みのどん底にアエ

グ魂の処へ」(「編輯後記」)と、穂波は記すこととなる。ここにいう「不器用」とは、時局にうまく調子をあわせられない、その下手さを指しているのか。

不平と墨塗り 穂波が不平を鳴らすぶつぶつという音は、『靈交』紙上でほぼ連続する。第259号(6月号)の「編輯後記」では、「今月号は生意気なやうな言を申上てみると存じますが」と記した。同号に掲載された、穂波の署名がある稿の論題は、「われは光なり」「人の光りなり」「完勝を祈る」で、2番めの稿には伏字が2か所ある。

不良人心が一層深刻になつて社会に悪臭が発しられてゐる。そして〇〇の××××のと言ふやうな美名の衣をうちかぶせても、冷笑して引き破つて居ると見ゆる点がある、実に憂ふべき事と思ふのである。

穂波のペンがついにお叱りをくらったようだ。第262号(9月号)の「編輯後記」で、

七月号の記事でウツカリとして各方面に御迷惑をかけて恐縮である。精神は兎に角としても、現在の日本の立場として、叱られても文句はない、俗に「みやはしてものを言へ」と言ふ如く場合が場合であるから大に注意します

と彼は神妙である。その第260号(7月号)では、長田穂波の署名がある「哀歌」に、いま全国に合唱されてゐる歌は暗黒の英勇より頂いた空想より生れてゐる、地獄讃歌に過ぎないのである。激戦の後に見るものは、勝利の幸福ではなくて、白骨散乱たる荒野に吹く風の音＝勝利の悲哀＝のみであらう。

とみえ、「編輯後記」では、

俗に雑魚はとつたが生命を棄てたと言ふ事がある。こんな結果に日本を追込んではないと思ふ、独逸を伊太利を讃美して戦争に勝ち得ても、同胞がサタンに負けて不義を行ふならば其処に国の悩みが絶へない

とみえる。穂波の生きる世界の、穂波の生をとりまく戦時の、なにがそう記させたのか、いっそうの考察が必要である。

ついに次号第263号(10月号)では、紙面の一部が黒く塗りつぶされることとなる。

穂波生の署名がある、問答形式で記された「信仰上の話題」との題がついた稿で、「キリスト教は西洋の宗教だと言ふ事が、我々の感情に悪いのですが教へは甚だ善いやうに思ひますが日本にキリスト教の如き神はありませんか」との問いへの応答において、

＝キリストは全人類の救主です＝／日本には八百万の神々があります、然し天地万物の創造主としての神はキリスト教程にハツキリ致して居られません。天の御中主の神がエホバの神性に近いと存じますが、しかし十分にわかりません。／日本神代記は歴史的に書かれて宗教的ではありません。

の下線部である（2か所の「キリスト」はゴシック体）。いま霊交会に残る『霊交』には、①この下線部が塗りつぶされているもの、②鉛筆書きで囲んであるもの、③小さい書き込みがないもの、これら3つの現物がある⁶⁾。

『霊交』の編集と発行に対する当局の干渉や統制の詳細は、いまのところまったくわかっていない⁷⁾。この墨塗り号から2か月ののち、『霊交』は「今時局がら国家の命を受け、こゝに廃刊するの止むなきに至」ることとなる。

大島で発行されていた総合誌というべき逐次刊行物の『藻汐草』は、1944年に休刊となったまま、それが再刊されることはなかった。「国策に順応」（「編輯後記」『藻汐草』第13巻第6号、1944年6月）するためとの理由が示された『藻汐草』の休刊と、『霊交』の廃刊とをおなじようにとらえることは不適切である。今後の課題となるが、『霊交』廃刊にはそれに固有の事情と理由があったとおもう。

穂波と三宅と石本 霊交会を結成し、穂波に受洗のきっかけをつくった療養者が三宅清泉（官之治）だった。霊交会は1914年11月11日に創立したという。ひとまず1936年以降の『霊交』紙面をみると、創立記念号となる毎年の11月号で三宅は、「祝辞」（R:216_36）、「記念会を迎へて」（R:228_37）、「霊交会創立記念会を迎へて」（R:240_38）、「霊交会創立記念日を迎へて」（R:252_39）、「霊交会創立記念日を迎へ

⁶⁾ 2010年に霊交会によってリプリント版が製作された『霊交誌』六に収録された同号は②である。

⁷⁾ 阿部安成「史伝としての『霊交』—大島療養所基督教霊交会の機関紙を史料化する」（滋賀大学経済学部 Working Paper Series No.132、2010年5月）を参照。

て」(R:264_40)と題した記事を執筆している。会長をイエスとする霊交会であっても、三宅が会の支柱であり要であり、かつ信徒以外からも仰望される篤実のひとであった。

「明治二十四〔1891年〕年生で、私は五十歳の春を迎へた」(「編輯後記」R:255_40)、「時々私は子供のやうな脱線をして友人達に大笑ひされる。もはや五十歳にもなつたのだから一寸は老年らしくやらねばと考へて」(「編輯後記」R:260_40)と記す1940年代には50歳台となった穂波、60余歳で霊交会代表を退いた三宅(穂波生「霊交会代表者」R:261_40)⁸⁾、その代表を38歳で引き継いだ石本(石本俊市「新しき革囊」(一)R:264_40)。それぞれに10歳からひとまわり歳の離れた3名が、霊交会の精神であり、核となって運営を担うものたちだった。

穂波と三宅は、『霊交』紙上でしばしばともに寄り添っているようにみえる。ひとまず1936年以降をみると、「共著」としての「恩寵の花片」の連載を始め(R:206_36)、三宅が「クリスマス」の題で稿を寄せると、すぐとなりに穂波の「静かな力よ」と題された詩がつづく(R:217_36)。三宅の「大島と宗教」という稿のとなりにはまた、穂波の「朝の梅が香」「いたづらつ子」という詩がくる(R:219_37)。こうしたふたりの稿がならぶようすをあげてゆくと――三宅清泉「感謝」＋穂波生「そのあしあと」(R:221_37)、三宅清泉「昇天者記念会を迎へて」＋穂波生「詩……病窓明し」(R:222_37)、三宅清泉「金沢常雄先生の御講話を聞いて／エレミヤ」＋穂波生「エレミヤ」(R:223_37)、三宅清泉「松山兄を葬る」＋おさだ坊「霊交余談」(R:224_37)、三宅清泉「大島のクリスマス」＋穂波生「宣言」(R:229_37)、三宅清泉「昇天者記念会」＋穂波生「藤井武全集発行について」(R:232_38)、三宅清泉「故神田慶三兄を偲ぶ」＋穂波生「私は知らない」(R:237_38)、三宅清泉「かげの働き」「昇天者記念会を迎へて」＋ほなみ生「願ひ／感謝／との出版」(R:238_38)、三宅清泉「霊交会創立記念会を迎へて」＋穂波坊「随筆」(R:240_38)、三宅清泉「祈り心」＋穂波坊「随筆」(R:242_39)、三宅清泉「母を偲びて」＋ほなみ生「子心の刹那のこゑ」(R:257_40)、

⁸⁾ 1937年には三宅の誕生日2月5日に彼の還暦祝いを「謝恩会」として開いている。その発起人筆頭に穂波の名がある(「三宅官之治兄」R:221_37)。

三宅清泉「神の御心」＋穂波〔無題の詩〕(R:258_40)、三宅清泉「病床中の感謝」＋おさだ生「寸鉄」(R:260_40)、三宅清泉「神の御心」＋ホナミ生「人生の勝利者」(R:263_40)、三宅清泉「霊交会創立記念日を迎へて」＋穂波生「輝けるもの」(R:264_40)、三宅清泉「祈り」＋ほなみ生「大島 SS 校」(R:265_40)、三宅清泉「エリクソン御夫婦に送る」＋ほなみ生「新春迎志」(R:附録_40) ——となる。

両者の稿が共鳴し共振しあっているときもあれば、まるで違う主題や内容のときもある。

もうひとりの石本はというと、彼は寡作で、そう多くの稿を『霊交』紙上に寄せてはいない⁹⁾。そのなかで彼の存在と意思とを鮮明に表明した稿が、「新しき革囊」と題された全3回の連載となった(R:254、265、附録_40)。総紙数が『霊交』の紙面で8段分となる、石本としては異例の文字数の稿である。新代表となった意気込みのあらわれだろうが、連載第3回にして「神の御導きを信じ「新しき革囊」と題して筆を起し、未だ応はしき内容を盛り得ず之からと思ふ時つひに廃刊の止むなきに立ち至つた事を残念に思ふ」と記さざるを得なかった。

のちに石本は、三宅と穂波を軸とした霊交会史、あるいは大島におけるキリスト教伝道史を、療養者の土谷勉にまとめるきっかけを与えることとなる。いまでも霊交会のひとたちが、自分たちにとっての正史とみる『癩院創世』(木村武彦、1949年)である。

愛夏愛国 穂波の夏好きについては、これまでもしばしば本連載でみたところである。その夏にあつて、「今年は近年にない脳を病みました」との苦悩を穂波は記した(「編輯後記」R:262_40)。文章は、しかし、とつづき、「室が涼しいので夏を愛する上にも最一つ夏を愛しています」と愉快なようすをみせ、そして、それへの周囲の応答も示した。

友人が「君は愛夏愛国の熱が強すぎる」と笑ひますが。これは癖なんだから仕方な

⁹⁾『霊交』に掲載された三宅と石本の稿の目録を前掲阿部安成「史伝としての『霊交』」につけた。

いので思ひ過ぎて失敗する事があります
とも述べた。癖なんだから仕方がない、とは、おそらく「愛夏」についての言だろう。
好きな夏の暑さのなかで脳を病んだというのだから。そして穂波の「愛国」もまた、
彼の癖であり¹⁰⁾、過ぎるほどのその心情とその表明とが失敗につながった、とも省み
られたのだろう。

この年は、夏の始まりに調子の悪さをすでに穂波は記していた。

夏となつた。夏は好きであるが今年は脳がヘンに悪く感じられ熱ばんで何かと気力
が乏しく睡眠を催し易くていけない、何を糞ツと頑張つてゐます／然し、耳鳴りが
し、目の方も視力がヘンにかすむ、何度び考へても首から上は全部組合になつて居
るとしか思へません。

というぐあいだ。それでも、いくらか涼しくなつたころには、「私は愛する夏を惜しむ
……夏よ夏よ……オー夏よ」(「編輯後記」R:263_40)と、ゆく夏を残念におもう心情
を明けひろげ、夏がゆけば、「愛する夏は早くも何処かへいつた」(「編輯後記」R:264_40)
と記す。穂波は心底、「夏を愛す」のだった。

穂波の死は、冬のことだった。冬の死を穂波がどう感じたか、それは知るよしもな
いが。

余滴 2009年5月から複数の媒体を執筆の場とした本稿の連載は、これで終る。『靈
交』は、癩そしてハンセン病の療養所内で発行されたとかキリスト教信徒団体の機関
紙であるとかいってかたづけられるような狭い内容と性格の逐次刊行物ではない。発
行部数が最大で1000部だったことをみても、その流通範囲は広く療養所外にも展開し
ていた。その「編輯後記」などをこうして抜き出すことにも意味があろう。

これまでは大島以外ではみられなかった『靈交』も、いまではそのリプリント版を、
国立国会図書館や都道府県立図書館、またキリスト教系大学の附属図書館で閲覧でき
るようになった。今後、大島での欠号分をふくめた現時点での完全版をつくる予定が

¹⁰⁾ この「癖」という表現が指し示すところとぴたり合致しないかもしれないが、穂波の
愛国をめぐる考察は、前掲阿部安成「癩と時局と書きものを」で試みた。

あるし、その刊行からしばらくしたところで、デジタル化した画像データとしてウェブ公開するところづもりもある。読者各人がそれぞれの読み方をする機会を増やすつもりだ。

最後に2点、気のついた記事をあげて連載を終えよう。1つは、大島へ荷物を送るとき
の注意である。

或方達が鉄道便にて送物を下さる場合に地図の上より屋島駅止に送られますが、屋島駅にては受取るに非常に不便であります、大島への鉄道及船便にては — 高松棧橋駅止 — が一番に好都合であります。別にサイソクするわけではありませんが、
気附たまゝに一寸申上げてをきます。〔穂波生「会計表を見ての感」R:255_40〕

ここにいうほんのちょっとした注意は、いまも有効である。青松園の所在地は、香川県高松市庵治町である。この住所で配送を手配すると、庵治経由で大島に届くこととなり、高松便に載せるよりも時間がかかってしまう。青松園高松事務所の所番地宛てに送るとよいと島のひとに教えられた。

もう1つは、紙面に印刷された記号について。第253号（1939年12月号）の「編輯後記」の行頭見出しに、二重四角で内側の四角が360度×1/8分傾いた記号が登場した（内側が黒ヌキと白ヌキの2種）。それがつぎの第254号（1940年1月号）にも登場。本稿ではワープロの機能上、それを一重の□として印字した。当時は、こうした活字もかんたんにつくれたのだろうか。

これとおなじ記号が記された手書き原稿が、霊交会教会堂図書室にあった。手書き原稿の筆跡が穂波の日記とおなじであることなどから、それらの原稿は穂波が書いたものと判断した¹¹⁾。『霊交』の編集を一貫して担った霊交会会員は穂波であり、『霊交』紙面に印刷された記号と、手書き原稿にペンで記されたそれとが一致するため、手稿の作者が穂波であることをいっそう確かなものとした。小さな発見ではあるが、その意味は大きい。

11) 阿部安成「長田穂波遺稿—死んだ穂波が遺したものは」（滋賀大学経済学部 Working Paper Series No.129、2010年4月）を参照。

~

会計係「報告欄」『靈交』第254号、1940年1月10日

「一、金壹円也、広島、中上悟様、一、金六拾錢也、大阪、小林松尾様／一、金貳円也、沖繩、家坂幸三郎様、一、金貳円也、京都、村上幸太郎様／一、金五円也、岡山、田中文男様、一、金貳円也、福岡、松尾逸郎様／一、金壹円也、愛媛、矢内原安昌様、一、金壹円也、神戸、原友安様／右、誌代及御寄附として有難く頂きました。会計係」

***「編輯後記」同前**

「□砲煙弾雨のまゝ地球は新しき年へめぐり入つた。全世界は大失敗の醜い姿のまゝで初日を迎へたのであるが、元旦の計事は何であつたかな！／地上に大した期待のもてない私は天上の光榮に希望ををく、信仰による永生にこそ常勝の歓躍がある、世に勝つ力は**キリスト**の救恵の中にのみある！／□祖先の大理想八紘一字の大精神に起つて神業の爲め、苦勞しつゝありと思ふ日本人の中に＝全体主義とか「我等のドイツ」＝等とナチスの一人でもあるかの如き論説を發表する者のあるのが、どうも腑にをちない！思ふに〇〇であらうが、〇〇であらうが、彼らをこそ西洋カブレと言ふ奴である。／□よく仏教国だとか、**キリスト**教国だとか言ふことを耳にするが、他宗は知らず……地球全面の上に**キリスト**教国と言ふ国家は一つも無い……断言する！／地上は現やサタンの支配下にある、然し其中の国々に小数の**キリスト**信者があつて神による生活を致して居る事を認めるものである……。／□地球全面に散在する小数の信者は弱い者ではない、**キリスト**の神の国を造る「種子」即ち神が目的を含めて蒔かれてある種子である。見よ、いまに時来りなば是等の種子は萌えて成長して＝地上神国＝を現出するのである、噫、その日こそ春風に充ちた地上平和のパラダイスがくるのである！／□神によりて新年が輝かしく思はるゝ、何となく光明の降臨が世界を一新せらるゝやうに思はるゝのである、兎に角も、**キリスト**を仰ぐ事によりて力はグングン湧き上つて来る。殊に東亜平和の大目的のために、衣食住にもとより生命を賭して努力しつゝある日本のために祈りのペンは躍るのである。／□新年号として余り雑

然と成り過ぎた感がするが、これで生命は**キリスト**の精神で統一されて居ると信じて居る。他の文芸雑誌の如く、感情の満足とか趣味の点とかによるのではなく — 聖霊の御導きによりて初めて生命に徹する性質の誌 — とて聖霊の感動を得なければ如何なる名論もやくにたゝない！／□福音誌を読むには先づ祈る事である、祈りなくて読めば聖書も糧とならないものである。これは聖霊の御交りの体験上、もつとも明白な一事でもある、或人がアンナ誌面からソナ深いものを受けましたかと不思議がるゝ！／□講壇用の大聖書を専念に読んで祈り、祈りては読んで居ります。そして**キリスト**の御心は、矢張り地上の問題としては唯一つ、十字架の贖罪によりて神と人とを確く結ぶにあるのみで、他は凡て永遠の来るべき御国に在る事を益々深く、訓刻されつゝありまして、どうやら実在の「天国」がハツキリと握れました。どうやら新しい生命の霊にふさはしい体の甦りが我ものになった。／□皇紀二千六百年の記念事業として、日本人なるクリスチャンとして、何か働らかして頂きたいものと存じます、若しゆるされますならば「伝道用パンフレット」を出版させて頂けば、最後の御奉公として神と皇国とのために全力を尽して見たいと祈つて居ります。何卒この小さき者の前進のために御祈り下さいますやう、有力な皆様の御力添へを願ひ度いと存じます。／□冬は私には苦手です、どうも霊は燃ゆるが肉体が不自由を増して外出するのが困難で致方がない、夜など床の中が温まらない、火はヤケドの憂がある、夏よ早く来ておくれと呼んでゐます……呵々。それでも冷水マサツは朝々やるだけの勇気があるから御安心下さい、決して冬に負け切つて屁古垂れたり致しませんから……呵々／□愛読者皆さんは元より、大島の病友に対しても、私は交際が上手でない、私の真実を知らない間は病友でも誤解するのであります。カイカブツたり又は冷淡と叱つたり、善い人だと誉めたり、野心家の天狗だと悪く思つたりせられます。私は天狗であり度いと存じてゐます、地上の犬であるより、天の狗であり、**キリスト**ワンワンと吠えて居りたいものであります……呵々／□昭和十五年もウンと吠えたり、ますます書きまわつたり、大いに前進いたし度い考へで祈つて居ります。狗も歩けば棒にあたると言

ひますから、或は叩かれるかも知れませんが、又よき獲物を神にクワエて行く事も出来ませう！」

*** 「報告欄」『靈交』第255号、1940年2月10日**

「一、金貳円也、松山、青野兵太郎様、一、金貳円也、島根、加茂教会婦人会様／一、金貳円也、御影、名和金次郎様、一、金壹円也、大阪、宮内光様／一、金貳拾円也、高松、エリクソン様、一、金六拾錢也、神戸、山口行之進様／一、金拾円也、愛媛、松岡貞三様、一、金壹円也、豊中、聖光会様／一、金五拾錢也、青森、管原千代様、一、金壹円也、大島、加賀看護婦様／一、金壹円也、大島、石川看護婦様、一、金壹円也、高松、植田テル様／一、金拾円也、下関、梅光女学院 YWCA 下級部一同様、一、金貳円也、丸亀、鹿角義介様／一、金貳円也、千葉、高橋音市様、一、金貳円也、静岡、飯野十造様／一、金貳円也、大島、瀧川きくの様、一、金拾円也、大阪、佐藤榎雄様／一、金参円也、京都、五味菊江様、一、金壹円也、香川、児玉しづゑ様／一、金壹円也、奈良、大館利男様、一、金貳円也、東京、宇津木勢八様／一、金貳円也、東京、栃木英夫様、一、金壹円也、神戸、南沢節様／一、金四円也、新居浜、平尾権之助様、一、金貳円也、新居浜、橋新様／一、金貳円也、兵庫、小島伊助様、一、金壹円也、高松、玉井友次郎様／一、金壹円也、愛媛、西原重敏様、一、金参円也、小樽、山口仁太郎様／一、金参拾円也、愛媛、〇〇〇〇〇様、一、金五円也、青森、高橋竹代様／一、金貳円也、満洲、清水政子様、一、金壹円也、広島、中上悟様／一、金五円也、神戸、日基神戸教会様、一、金貳円也、京都、伊賀貞子様／一、金壹円也、兵庫、阪本皆之助様、一、金壹円也、大阪、高瀬時助様／一、金壹円也、高松、森川仲子様、一、金貳円也、愛媛、岡田大吉様／一、金壹円也、岡山、井上孝様、一、金六拾錢也、岡山、馬淵美子様／一、金壹円五拾錢也、堺市、中央教会安井 SS 様、一、金五円也、堺市、中央教会 SS 様／一、金貳円也、堺、石津日曜学校様、一、金拾円也、東京、駒込教会 SS 様／一、金九円也、堺市、池上孟雄様／右、誌代及御寄附として頂きました。」

* 「編輯後記」 同前

「新しい歌を唄へ」は基督者の時局に対する祈りであり、忠君愛国の道として更に戦争参加の根本原理と信じて記して見ました。これには賛否両論の有ることを思つてみます。理想問題として、実際問題として御教示を乞ふ。／聖書余談は余り身近か過ぎる問題ゆへ満足しきれない感が沢山のこつてゐるが致方がない、只聖書より受くる暗示を二、三くんで見たに過ぎぬ、いつか自分に手をのべ掛け給へるイエスについて証言したいと思ふが、長文になるであらう。／差入に厳しかつた寒さが意外に温いのでヤリヨイと思つて居ると、又急激に寒波が狂ひ出して来たので閉口してゐる、それでもコレデ本格なのだから、決して不平は言へない。害虫などは寒波で亡び、田畑はこれで肥ると言ふから。／編輯にかゝると書き度い事は多く想へるが、紙面が狭い、たゞ祈つて与へらるゝまゝ、又ゆるさるゝまゝに終るのみである。今日も SS の女生が永眠した、掌中の玉をなくした悲しみ、たゞ神に全任して祈るのみ……聖旨であらう！／明治二十四年生で私は五十歳の春を迎へた、この内で三十四年は病気の月日であつた。泣きもし呪ひもした。然し、救はれてよりは、恵の月日のみで重りゆく病床の上で感謝しつゞけ、そして使命に立つて走りつゞけさして頂いた。／このさき幾年生きるか、聖旨のまゝに只管に信じ望み愛して**キリスト**の十字架に一途にすがつて離れない事一つの外に願ひはない……！／年と共に**キリスト**の近寄り給ふ事が一入に心に迫らるゝを覚ゆる……！／ラヂオのニュースを聞いてみると、悪しきいま世に悩む人々の心が理解さるるやうに犇々と来る、歐洲文明も清算期の審判に這入つたのであるまいか、何方へ廻つても＝神のたゝかひの勝利＝の上に立たねば、結局は繰返しだ！／個人にも国家にも民族にも＝神による基本精神を吹き込まねば＝ならない福音もセンチメンタルなコソクなパリサイ主義より、大所高所に立ちて各階級に把握さすべき指導者の起こるやう祈る。オー主よ、早く来たり給へ、アーメン／私は自分に愛想をつかす。反省して罪人の首としか思へない、信仰生活二十八年にしてこれである、自分を悲しむのみ＝然し、**キリスト**の十字架を仰ぐと勇氣と希望と感謝の喜びがわく、

永遠の生命は**キリスト**の救ひにあります／オー小雪が降つて来た、西の山が寒波に鳴つて居る、これでは今日も船が来ないであらう、三宅老兄の回春病院五十年の原稿を歌欄に割込み、以て感銘を深くした。女史は神に従殉した其事が即ち日本に対する愛の貢献であつた。／時局がら予算生活の私共には、何か不自由勝ちに成つて来た、当局ソレソレの係員各位の御心労に感謝する。そして又一人応召兵を送り出した、国をこぞりての総力戦だ、我らも十分に覚悟してゐる、最後迄祈りつゝ、頑張るぞ。／サア、如月号も出来た ― 各位の御清福を祈り上げつゝ、擱筆いたします。／大切なお体、何とぞ御自愛下さいまして、神に従つてたゞかひ、神に勝利を捧げませう。愛する祖国を神の使命に迄おしあげ「選国選民」の光榮に浴ませう。デハ、さやうなら！」

会計係「報告欄」『靈交』第256号、1941年3月10日

「一、金貳円也、富山、高橋八蔵様／一、金貳円也、沖縄、宮川量様／一、金六拾錢也、高知、大坪虎意様／一、金壹円也、愛媛、宮浦 SS 様／一、金五円也、セレパス、鳴海新太郎様／一、金壹円五拾錢也、香川、平田祐三郎様／一、金壹円也、栃木、ベテルホーム様／一、金貳円也、愛媛、小川謙太郎様／一、金六円也、堺市、池上猛雄様／一、金参円五拾錢也、高松、三番町教会様／一、金五円也、京都、同心幼稚園様、一、金六拾錢也、堺市、星澄様／一、金五円也、愛媛、村上喜一様／一、金壹円也、東京、矢内原忠雄様／一、金壹円也、下ノ関、本末秋義様／一、金五円也、東京、釘宮辰生様／一、金五円也、愛媛、安井タカ子様／一、金貳円也、愛媛、真鍋福恵様／一、金壹円也、広島、中上悟様／右、誌代及御寄附として頂きました。会計係／右の他に、穂波へ自由使用をゆるされ、御預り致して居る分もあります。此処に厚く御礼申し上げます、この小さき数ならぬ者を特に御心にかけて下さいます御祈りに加へて頂き、尚斯く御配慮下さいます事は、感謝感激です！編輯生」

*「編輯後記」同前

「□皇紀二千六百年を祝福いたします、天地の創造主、真の神が斯く恵み給ふた事を

思ひ、国家のため感謝に絶えません。此上ながら世界平和の大使命に立ちて神の栄光の器としての選びに預るやう、衷心より祈つて止みません。／□二月号に妙なことを申し、又本号にも妙なことを申します。しかし、今程**キリスト**教の純粹点である根本生命を検討して、混入物を取り去るべき必要な時は有りません。日本に於ける**キリスト**教の危機にあると思はれます。／□寒波の盛りで、珍らしく島にも白雪と松の青との美しい彩りの山や磯が見られました。三月弥生等の月と時候は、太陰暦の方がピッタリしてゐます。しかし、もう直ぐ暖かに向ひますから、思ひ切つた御活動を御祈り申し上げます。／□病体が年一年と寒さに弱くなりゆくのを覚えます。心は「何を！」と威張つてゐても、ツイ小さくなつて終ひます……広島の平山姉が「冬くれば春遠からず」フレーフレー穂波イ……と応援して呉れますが、何の五十日すれば。／□部屋に籠りて聖書を読み、お茶をのみ、さて瞑想いたします。何程かにイキ目に見積るのですが「こいつ罪人です」大馬鹿者でかありません、若し**キリスト**の御救ひが信仰の外は絶対でなかつたら、地獄必定としか思へません／□かうして祈りつゝ、ペンに専念して居る事が不思議に純なのに驚きます、そして聖霊の御清めと御助けとを確信して勿体ないと思ふのであります。拙文は無学ゆえで致し方ありませんが、何ものも恐れず、神の外余念なき事です！／□物資がなかなか手に入らない、価格は高くなる一方、銃後のおつとめも骨でありませう……だが○○や○○○の如き遊び場は甚だ盛んだと……不思議でなりません。自覚顔しても腹に這入つて居ない、果して新秩序はどうでせう／□何事に処するにも＝対者は神である＝神を対者に活きるもの程ドツシリした生命はないが、世の眼には自由にならぬ頑固者だと申す、然し、地上人間、物質の命令にのみ動いたとて、滅亡とほり出しとを食ふ結果のみです。／□今日は二ヶ月目で散髪場に行き、キレイに刈込で貰ひました、至極丁寧にやつて呉れますので、勿体ないやうに思ひました。私の頭髪は白いのが増したやうです、十八と言ふ若い頭で入所したのだがなアーと感慨ふかくしました／□一度に三台で刈つてゐる、私の隣りは、ハイカラ頭に鋏の音が軽く鳴つてゐる、あんなに刈つて貰ふ内は結構、いまに

世界地図のやうに禿コツレになるんだと思ふと — 悲哀なものがグツト来る — ので
ありました。／□さあ、三月号が生まれました。何卒、御教示下さいませ。珍妙な事を
記くと笑ふ方も有ませうが、こんな雑誌も一つあるのも必要でせう、文章がなつとり
ませんが、何を言はんと致してゐるか、何卒そこを御判読下さいませ。／□いよいよ
サヨウナラを致します。会友各位の御清福を祈り上げます。春遠からず、神の御空は
地上の如何にかゝはらず、希望に輝いて居ります。仰ぎ上げて、丈夫の如く勇ましく
大発酵力を頂き、大いに奮闘いたしませう。／全完」

会計係「報告欄」『靈交』第257号、1940年4月10日

「一、金五円也、東京、富山タオ様／一、金壹円也、福岡、近藤悦様／一、金壹円也、
堺市、平尾経俊様／一、金参円也、宮城、鈴々木立春様／一、金六拾錢也、岩手、三
浦信一様／一、金壹円也、長野、青柳藤助様／一、金参円也、大阪、岩本琢美様／一、
金貳円也、丸亀、日本基督教会様／一、金六拾錢也、長野、有井節子様／一、金貳円
也、愛媛、平尾権之助様／一、金貳円也、堺市、根津さと子様、三輪つゆ子様／一、
金壹円也、広島、中上悟様／一、金貳円也、都城、末永三喜太様／右、誌代及御寄附
を頂きました、会計係」

* 「編輯後記」 同前

「□イースターだ、復活だ、何と言ふ深い信仰でせう。何もかも永遠の相に視ることは
実に新らしく甦つて来る。一切の解釈が天に通じて来る。天路が開かれたのですね、
救はれ生命の価値は無限だ、何と言ふ大なる神愛でせう！／□程よき処で永く光つた
露も、葉裏に生れて早く散つた露も、落ちて碎けて個性なき水に混合して終ふと観る
人生はハカナキ極みであり、善悪も束の間の差別だが。復活による人生は、凡てが永
遠の個的責任を思ふと人生は深刻だ。／□癩床に臥して只静に祈る事も何と言ふ有難
い我が永生への価値であらうか、余りにも尊きに過ぎて勿体ないことであると涙して
喜ばれます。／高本小羊君の証言は、何と言ふ神の栄光でせうか、同君の為めお祈添
下さい／□三月号の宮内、鈴木両姉の証言と、高本兄の証言共に尊い体験の信仰より

湧き立てる生命の勝利であります。自分の衷心の祈りは — かうした内より湧き起る喜びと力との生命の信仰 — を全部の兄姉の上に恵まれん事……！／□春だ、春が来ました。本誌が皆様の御手に届きます頃は、私もトウドウ暖い中に来たぞと、心も身も勇み立つて聖書研究に原稿にバリキをかけて居りませう。それにつけても、新生新聞の報ずる処、朝枝兄の死を惜まれます／□大島は別に変わった事ありません、本誌発行前に「患者自治会世話人」の改選が行はれて居りませう。事変下の大島も物質的に影響を受けて、諸事業に苦しき経営を覚えられてみます。皆キンチョウして祈り沈んでをります。／□霊交誌は、各地の方より愛読申込まるゝ人が続々と起つて下さるので、一入に祈らされ、力を引出されて居ります、増刷に迫られてみます、此上とも神の国のため、愛する同胞のため、特に青年男女のため、御用ひ下さるやう願ひます／□安息日問題を「聖書余談」にて取扱ひましたが — 今の日曜日が**キリスト**の御復活の日である事 — これを記しをとしました。天路の開通した記念日として感謝の日であり、新生への首途の日として祝はねばならぬ……！／□**キリスト**教は歓喜と感謝の宗教と思ひます。現代の世界は、下安と悲しみの世であります……斯る世にとりて光となり、塩となるために、是非とも告げ知らし度いものと存じます。永遠の歓喜と光明、これは一般に求めてみませう／□しかし、死にに來た大島で、こんな生命の証言者とせられたとは、自分ながら不思議であり、奇蹟と存じられます。全く予期せなかつた新しい生命です／□こゝ三日程は気温も高く、細い雨がシトシト降つて松原が紫色をおびてうつすらと煙り、何処となく「春だなアー」と思はれ、体 — のチョウシも甚だ快い — 兼て研究してゐる創世記についての余談を起稿したい心が動く。／□自分としては詩稿は余技に過ぎない、一生の間に聖書に関する一冊を世に残し度い願ひで一杯である、癩床のドン底で読む聖言の味と、其味より見直した偽りなき人生観、そして其処に生かされて行く人生の喜びと強さとを！／□血みどろの中に救はれ、血みどろの中に微笑み、血みどろの中に伸び育てらるゝ生命の祈りは、醜き極と聖なる極との大矛盾であり、痛ましき者の歓喜であり、余りにはかなき中の余りにも輝く

恩寵と言ふべきである。／□愚弱の罪人が**キリスト**に活さるゝ事は、過分の御憐みに相違ないか、又一面、懸命の闘ひの毎日でもある。昨日も一病友が重症室より這出で入水自殺をやりかけて助けあげられたが、あゝした思ひつめた心がハツキリ知れる！／□痛苦の底の歎喜……こんな言は健康者の掬み難いものであらう！／不自由の極致を圧して歌ふ讚美の靈魂は＝天父の御胸に如何に響くであらう＝**キリスト**の血汐に混入して香つて欲しい、斯くてヨブ記は我がもの／□痛苦も真剣、感謝も真剣、一日の生活も真剣であつて＝永生かしからずば死かである＝とは言へ是は決して靈交会及病友六百のみでなく、他にも又このやうな生活者の有る事を思ふと信者及不信者の為に祈らさるる！／□靈交誌よ、お前は誠にブキヤウな娘であるが、行けよ、世の悩みのどん底にアエグ魂の処へ、そして共に泣いて呉れ、お前の上に一滴の涙が落ちこぼれたなら、其処にこそ真剣に神を喜び、神の子が新しく誕生するであらう／□涙ながらに記してゐる内に紙面は尽きました、皆様、御清福にサヤウナラ」

*** 「報告欄」『靈交』第258号、1940年5月10日**

「一、金拾五銭也、長野、処女会様／一、金参円也、東京、田中順一様／一、金壹円也、京都、東山玉江様／一、金貳円也、愛媛、平尾権之助様／一、金壹円也、広島、中上悟様」

*** 「編輯後記」同前**

「○今月号は「聖靈について」うづめました。何分にも専門ではありません、只実際の上より記しました。それと聖書について、又神学上に於ては先生方の領分として、私は平信徒として、これでよいと思つてゐます。／○聖靈について、一青年との問答を記しましたので「聖書余談」は次号に割愛致しました。希は女工さんにも中学生にも理解して頂けばと祈つてゐます／○大島患者自治会の総代さん以下役員の改選にて、一寸多忙でありました。／石本俊市兄が総代の任期満了で休まれましたが、又靈交会より副総代に半田市太郎兄が選ばれ、他にも主任や評議員や顧問やに四、五人任せられ、私も副議長に任せられました。島の選挙は逃げる方を引張るので、真の理想的

選挙であります。／〇一ケ年の間に四拾余の死亡者がありまして、其半数が盲目者であると言ふ事に驚きます。失明者……殆ど全身麻痺し、無感覚の手足をもつて幾年かの間、自分の身のまわりをやつて来た事を思ふと、その忍耐、その辛捧、その苦闘の程に頭が下るものであります。実に多大なる労苦を尊く存じられます／〇舌の感覚にたよりに靴をはく……然し、こんな事も出来ると思ふと嬉しい……却つて他の人の手で物を動されると困ると微笑せられ居るのには何とも言へない心やかなるゝものがあります。一番強い人は一番不自由な人か？／〇私共のメンバーにも長生者が多いので、比較的小数な会で比較的極不自由な者が多いのでありますが、その不自由な者が又

＝ 感謝の生活をしてゐる実状 ＝ これは聖霊の御力と申す外ありません。僅か六拾名のメンバーで重病室へ入院（特に重症者の養生する室へ行く事を入院すると言ふ）する者が多い時は十七、八名、少い時で十名内外が常であります。／〇あゝ春めいて参りました、レプラ菌に胸をやられて居る者には異変の多い時であります、未だ肺を犯されて居ない病者には、暖くなることは喜びであります。私は脳をやられかけて居るので、ユーウツな日も尠くありませんが、冬より夏の方が愛せられます。／〇近頃 ＝ 剣世記余談 ＝ として私の信仰思想の清算録の如きものを、特に無学な人に聞いて頂くやうにと三百枚近く記して居ります。いま三分の二ぐらい書き上げて居ます。この仕事は救はれし感謝の捧物として遺したいものと祈つてやつてゐます。／どなたか見て下さつて発行して下さる方はないでせうか……。／〇先に「藤井武全集」を寄贈して頂き、今度又、藤本正高先生の独立聖書研究会より「畔上賢造全集」の御寄贈を頂きます事、図書部に一權威を加へて感謝に堪へません。会の図書部は光彩を加へ輝いて居ますが、目を犯されて読む事の出来ない兄弟の多いのを悲しく存じられます。／〇いましばらくすると、霞の奥より鯛網を引く勇ましい声がきこへて参りませう。つゝじの花も香りませう。とにかく、よい時候でペンも軽くなりませう。追々と病氣も昂進して来つゝありますので、何時ペンが執れなくなるか知れません。しかし、外が弱くなる程に強い人間として生きぬかして下さるでせうから、決して悲観は

いたして居りません。／○四月一日に開所三十二年の記念式がありましたが、開所の年の入所者として私は感慨無量でした、そして＝今更ながら神恩、皇恩、国恩に感謝いたし＝徒食の三十三年を恥かしく存じました。実に無用の長物であります。／○国家の時局益々困難、物資配給不足の今日、社会のために申訳なき存在と存じますが、一面また療養所に居て癩根絶を希ふ生活を思ふて、いさゝか慰めて居ります（流浪して菌を散布せない点を）一層に祈りに精進して、皆様の御活動の伏兵たらむ事と願つて止みません。／○靈交誌も少しづつ会友を加へられ、各地より読者の起つて下さるのは、皆様の御祈りと御紹介の労による処と嬉しく存じて居ります。厚礼申上ます。／○それでは、五月号もこれで擱筆いたします。サタンの活躍のはげしく成ります時候、何卒、聖戦の駒を勇ましくお進め下さいませ。デハ、サヤウナラ」

会計係「報告欄」『靈交』第259号、1940年6月10日

「一、金六拾錢也、福岡、横田政次郎様／一、金六拾錢也、天塩、石井六蔵様／一、金参円也、台北、上川豊様／一、金貳円也、愛媛、平尾権之助様／一、金貳円也、長野、倉田様／一、金壹円也、広島、中上悟様／一、金六拾錢也、神戸、山口行之進様／右、誌代及寄附として頂きました。／会計係」

*「編輯後記」同前

「○少年舎に鯉幟りを立ててゐます、男性の勇しさ、清しさが思はれて嬉しい、若葉吹く風も肌心地がよろしい、よい時候になりました。然し、祖国は今が一番大切な秋でありますまいか、千日に刈りたる萱を何とか為る事のないやうに、真の神の光に立ちて自重し、最善を尽ませう＝祈りの特に必要を感じます／○今月号は生意気なやうな言を申上てゐると存じますが、聖靈が御導きにて斯く言はざるを得なくなりました、斯く言はざれば、私の心は禍ひであり非常に悩みませう＝我が同胞の救はれん為めには＝嘲笑も迫害も反感も甘んじて受くる事が出来ると存じます。自分の病苦など愚痴つてゐられません。／○療養所内は、東洋平和の為めならばと、祈り一つに心を傾けまして、衣、食、住の事など黙々と耐えて、自慢したい程＝皇国の精神

に生きて居ります — たゞ残念なのは、保育所より大浜文子先生を失った事であり
ます。／八ヶ年の御努力を深く感謝いたし、前途の御清福を祈つて止みません！／○穂
波は「物置道場」を這出して共同生活の室へ移りました。相変りませず、御訓導下さ
いますやう御願ひ申し上げます。／友松円諦さんの「真理」誌上に東京の北条、九州の
尺草、長島の明石、それに穂波を加へて、日本癩者の四天王と数へてあるとの噂を承
りました。／○その三天王は既に逝去して、舞台に残つたのは自分一人誠に淋しく思
ひます。癩者は勉強し修養して、やゝ円熟して来ると倒されます、悲しい事でありま
す、また立派な教養ある人格者も多く居られますが、一身上の都合で黙して表面に出
られません。四天王が癩者の偉い方面の代表では決してありません。／○振替口座加
入名 — 長田嘉吉又は靈交会となつて居りますから — この名でお払込み下さいます
やう。でないと局で返送されるかも知れませんから。／○少年、少女の発病者が沢山
收容されて来ました、可愛相でなりません。／日曜学校に全部参りますが、少年の靈
を導くことは心おのゝきます！／自分はその器でないと思はれるのですが、誰もやる
人がないので、然し、見捨ててもをけない重大問題でもあり、こゝもとジレウマに乗つ
た気がします。／○事変の影響で、療養所の職員で他へ転向する人もある噂です（大
浜文子先生は別です）これは何か制度に欠点があるのであるまいか、こんな処は官吏
と言ふより、献身的理想者に働いて頂ける道を開いて貰ふと、人も求め易く事業も進
展するのであるまいかとも考へられます。それもやつて見ねば……？／○二十五日を
中にして六月は — 癩予防運動がある — でありませう。これも余程注意してやらぬ
と効果はあがらないでせう。反対に癩恐怖病者を作つたり、收容力もないのに在家患
者の立場を害したり、面白くない結果に成り易いものであります。やらねばならぬ事
柄にして効果をあげ難い運動でせう。／○健康日本……これを祈るなら、徹底的に収
容力の拡張をやらねば、癩者は療養所以外では見られない程にせねば救癩運動の効果
は減少せざるを得ないでせう。それより、療養所の内部機構や他の方面に改善する
点に各位の御援助がのぞましいとも存じます。時局がら当局も患者も苦心があります。

／○では皆さま、御清福にお祈りいたしまして、六月号の擱筆いたします。」

会計係「報告欄」『靈交』第260号、1940年7月10日

「一、金壹円五拾銭也、岡山県、林麟三様／一、金壹円也、門司市、鶴原智恵様／一、金壹円也、堺市、嘉陽田武正様／一、金貳円也、京都市、伊賀貞子様／一、金貳円也、大阪市、大西君子様／一、金壹円也、倉敷市、高戸猷様／一、金貳円也、愛媛県、平尾権之助様／一、金貳円也、東京市、遊佐敏彦様／一、金壹円也、広島市、中上悟様／一、金壹円也、西宮市外、三島甫様／一、金六拾銭也、静岡市、中川寛水様／右、誌代及御寄附として頂きました。／会計係」

*「編輯後記」同前

「○俗に雑魚はとつたが生命を棄てたと言ふ事がある、こんな結果に日本を追込んで
はならないと思ふ、独逸を伊太利を讚美して戦争に勝ち得ても、同胞がサタンに負けて
不義を行ふならば、其処に国の悩みが絶へない＝真の義を行つて国を高くすべし
＝である。現在の実際に照して、祈心に涙は湧く！／○欧州はあげて神の審判の鞭
の下に喘いでゐる。勝戦を祈る前に、何で悔改ないのであらう。奇蹟を口にする前に、
何で神に帰らないのであらう＝神は人間の物慾の奴隷となりて殺人行為になさらない
＝であらうと思ふ。此儘の心では砲火はをさまつても、決して真の平和は来らな
いであらうと思ふ！／○神を棄て、科学の力を頼み、経済の力に依存する。現代はエ
レミヤの泣く時である。真の忠臣、真の愛国者は同胞の心の為めに、其の前途の為め
に、哭き叫ばざるを得ない時である……然り独逸に英国にエレミヤの涙ありや叫びあ
りや……オーいまや基督者の責任は鞭を振りつゝある神に問はれてゐる！／○砲火の
武昌、憲兵分隊の田井英良氏より短歌を頂いて、感激と感謝で一杯である。生命懸の
活動の中に斯くも我らの為めに祈つて下さる、その姿を幻として合掌せずに居られな
い。これを本誌に記して永く残したいと思ふ。／如何なる中にも「神の心に通ふこ
そ人の心の真」であります。／○大島も春の運動会と同時に、職員軍と病友軍との野
球戦があつた。三回戦となつて、結局は病友軍が優勝した、近頃めずらしい試合で面

白かった。／その前日に「何れが勝つか？」との予想投票があつたので、人気をひきたてた。兎に角く、病友軍の勝利となつた事は、一般予想から見て平凡に終つた。／○山本静雄兄が永眠せられた、一粒の麦地に落ちて幾十倍の実を結ばせ給へ、御遺族の上に御慰めありますやうに祈りて居ります。／○夏となつた。夏は好きであるが、今年は脳がヘンに悪く感じられ、熱ばんで何かと気力が乏しく、睡眠を催し易くていけない、何を糞ツと頑張つてゐます／然し、耳鳴りがし、目の方も視力がヘンにかすむ、何度び考へても首から上は全部組合になつて居るとしか思へません。然し、断然闇取引はゆるさない／○小豆島の方より白峰の方へと大島の暁の空を鳴き渡る「ほととぎす」の、腹にしみとほるやうな彼の声を楽しみにして居るが、今年は未だ聞かない。／鉢植のアマリリスの花が咲いたのが嬉しい。肥料と水とが過ぎて枯れて終ふて困る。これで教へられるのは義を含まない愛は、反つて有害である事を！／○時々、私は子供のやうな脱線をして友人達に大笑ひされる。もはや五十歳にもなつたのだから、一寸は老年らしくやらねばと考へて、おもおもしろくやつて試験してみたが、キユウクツであり、おかしくもあり、ツグワない……。／穂波は心安いやうで厳格なやうだと言ふ噂があるが、他人の目は正直な。／○松村ふじ江姉と日野信市兄との詩稿は、記事の都合で割愛いたして後日にまわしました。「創世記の研究」を致してゐますが、益々尊く、又面白く楽しさこの上なしであります。聖書の研究と安静とを同時にいたします。その方法は＝聖言を心に含みて臥床する＝ことであります。何卒、御休心願ひます／○追々と暑く相成ります。神と人との為め大切なお体、何卒、御自愛下さいまして十分御活躍なされるやう、祈り上げます。では又来月に……サヤウナラ」

*** 「編輯後記」『靈交』第 261 号、1940 年 8 月 10 日**

「○編輯中の只今頂いた第一線よりの御便を皆様に御披露いたします。／暑中御見舞申上げます。／彼の内海で、逆境に立ち不幸なる生活をお送りなされる皆様の事を思はば、戦塵の苦労も甘露の一滴と変つて、私達は今元気一パイはりきつて日支永遠の和平の為め、陛下に微力ながら御奉公を申上げて居ます。戦地の将兵は元気です。愛す

る祖国の皆様、どうか御安心下さい……貴方達も神の試練に美しくアジアの神の使徒たるの大使命に……共に私達と心もて心にて結び、正しき歩調にて十五年の夏を楽しく送りませう。終りに長田氏達皆様の御清福を祈上げます。こんな手紙でも、病む皆様のお心に一寸でも慰め得れば幸甚に存じます。／愛する皆様、中支の一兵より／○いまこそ、全世界に投入すべき急要なる事がある。その原理を記して世に問ふ事と致しました、別に珍しい言ではないが、活ける聖旨であると信ずる／暑中御見舞申上候／益々各位の御精進を祈上候／八月十日／靈交会／会友各位様／○今年の梅雨は程よき雨を落してカラリと晴れました、蒼深の空を渡る風は肌にすがしく、陽の照り込む勢ひも全く夏がととのひました。私共はこれから猿又一つとなつて、汗と埃りとの中にねたり起きたりして闘ふのでありませう／常に発熱気味の病軀一つの守も余り楽ではありません、特に重症者を思ひます、又、愛の労をとる看護人達のことを祈らざるを得ません。／○ペンの御用多で「文章奉仕」の労の疲れ、光栄の辛労を有難く存じてゐます。我れ乍も生かさるゝ尊さを想ひまして、益々祈り励まされます。或る方の御依頼によりまして「癩療感想集」それは別名を附けますが、斯る内容のものを近く起稿いたします。何卒、お祈り添への程をおたのみ申し上げます……。／○暑い盛りは余りムツカシイ問題はさけ度いと存じますが、与へらるゝままに記しました。幸ひ、会友各位の熱心に励まされまして、ペン持つ心はおどります。此上ながら、御祈り添へと御叱訓とを御願ひ申し上げます。／○こんな誌面にては各方面に用ひられ、特に第一線の兵隊さんに喜ばれます事は何より嬉しく、皇国の御為めに感謝しつつ、御奉公心に燃えます。／酷暑の折柄、皆様の御清健を祈りつつ、擱筆いたします。又来月に……。」

会計係「報告欄」同前

「一、金六拾錢也、鳥取県、遠藤忝子様／一、金六拾錢也、福島県、小林マスエ様／一、金壹円也、豊中市、聖光会様／一、金参円也、新居浜市、橋新様／一、金貳円也、愛媛県、平尾権之助様／一、金貳円也、大阪府、富永繁蔵様／一、金貳円也、大阪府、

大角丈之進様／一、金壹円也、大島、東門美代様／一、金五円也、神奈川県、奥座克己様／一、金壹円貳拾銭也、広島市、平山千代子様／一、金六拾銭也、滋賀県、谷口源蔵様／右、誌代及御寄附として頂きました、会計係」

会計係「報告欄」『靈交』第262号、1940年9月10日

「一、金拾円也、大阪市、山本ノリエ様／一、金六拾銭也、京都市、杉山勘一様／一、金五円也、岡山市、田中文男様／一、金壹円也、広島市、中上悟様／一、金貳円也、大島、奥村竹一様／一、金貳円也、奉天市、清水まさ子様／一、金参円也、堺市、井上英雄様／一、金壹円也、広島市、中上悟様／一、金八拾四銭也、大島、東門美代様／一、金六拾銭也、滋賀県、谷口源蔵様／一、金貳円也、愛媛県、平尾権之助様／右、誌代及御寄附として頂きました。会計係」

*「編輯後記」同前

「白露や茨のさきに一つ宛……と言ふ俳句が思ひ出さるる山路の朝景色となつた。定めし今頃は、稲田の朝は気持よく、豊作の兆と美しい露の玉を飾つてゐることであらうと、不図故郷の姿が幻の如くにうかんで来る。／何と言つても現在の日本は、勝たねばならぬと収穫れねばならぬとの二つ、是が戦線と銃後との祈りであらう。空腹では戦争は出来ぬと古い文句にもあるが、然し、一千万石の食ひ残しをやらふと目算の立つた処は確に底力である／七月号の記事で、ウツカリとして各方面に御迷惑をかけて恐縮である。精神は兎に角としても、現在の日本の立場として、叱られても文句はない、俗に「みやはしてものを言へ」と言ふ如く、場合が場合であるから大に注意します／六月の下旬に八月号を、七月下旬に九月号を編輯するので、一寸早過るやうに考へるが、聖書研究もしたい。雑誌や書物も読みたい。原稿も記したい。手紙も書きたい。其間で詩も作りたい。お茶ものみたい。おおせはし？／療養所に居れば遊び暮してゐると思ふ方が多いでせうが、実は私は目がくらむ程多忙で、時に有閑人扱ひされて困る事がある。五月に二十日程何も為さずにみたら、目のカスミもとれたが、六、七両月働いた処、また目が霞んできた。／貧乏せはしい、療養所に居ても貧乏人はアクセクやらねばならぬのである、

人はパンのみによりて生きないが、又パン的問題も中々こうるさく付き纏ふ。使命のみに余念なく走ると言ふ事には経済問題が手足に絡みつくものだ！／珍妙な事を言ふやうだが、これは素寒貧の教師や社会事業家のために祈らざる有難い体験である。今後は大陸に進出されるにしても、パウロの如くに手職を為しつつ福音を伝える ― 信仰生活 ― の実際に確立の必要を思ふ。／軍人たりし信者かうした人が尠くないと思ふ、斯る人物を中心指導者と起つて貰つて大陸に福音村を、其処に彼処にと設けて信仰生活の眞の光輝をあらはして下さると善いと思はれる。私は斯る夢の実現を祈つてゐる……。

／雨水を利用しての立派な上水道が出来ました。塩分と金サビの多く含まれてゐる井水と水量不足の困難とより、同時に救はれる訳であります。／小さい島の土地には、他では考へても見ないやうな事に迄苦労があります。／所長様初め、当局各位の御心配は一人の事と存じます。しかし、段々と各方面とも設備の充実を見ます事は、感謝の外ありません。救癩の事業のカクレたる努力の如何に大なるかを思はされます、第二の故郷に祝福あれ……。／今夏は近年にない脳を病みましたが、移転した室が涼しいので夏を愛する上に最一つ夏を愛して居ます。友人が「君は愛夏愛国の熱が強すぎる」と笑ひますが。これは癖なんだから仕方がないので、思ひ過ぎて失敗する事があります／日本は大切な秋であります。各位なにとぞ御自愛下さいまして、八紘一宇の新体制の完成のため、御奉公をお願い申し上げます。神の義に通じたる立派な日本の聖業と為し上げて下さいませ。今月はこれでサヤウナラに致します。／希くば神の御恵力、皆様の上に益々豊かならむ事を祈上げます……。／アーメン」

会計係「報告欄」『靈交』第263号、1940年10月10日

「一、金壹円也、大島、奥村竹一様／一、金壹円也、愛媛県、山下彰様／一、金貳円也、愛媛県、平尾権之助様／一、金拾五円也、倉敷市、林源十郎様／一、金壹円也、広島市、中上悟様／一、金壹円也、大島、東門美代様／右、誌代及御寄附として頂きました。会計係／附記 ― 穂波に自由使用をゆるされし方達にも、深く感謝致します。

／（ホナミ）」

* 「編輯後記」 同前

「神学でなく教理でなく、信仰と生活について真剣に考え、人生と宗教、国家と神、等について真面目に考えて居る時代は現今でありませう。特に日本の**キリスト**教界にとりて、これ程に有難い秋はなかつたと思はれる。／外的に見て、一部に伝道難を啖く者もあつたが、全体として信仰が燃えあがり、性質の善い求道者も沢山に起りつゝあると聞く。殊に日本の**キリスト**教が独立すべく迫られ、大合同すべく成つて来た事である。／更に既に全支に向かつて伝道者が送られ、尚送られむとしつゝある事である。／然も、早くも人格的に信用を集めて市場に買物に行きても、神の人としてカケ値を言はなくなつたと言ふ、全都の尊敬をうけて居る使徒もあるときく。／中には自ら汗して食を得、余力できれば貧しき支那人を助けつゝ、福音を説いて居る者もありとか＝日本の**キリスト**者は、自分の為め、皇国の為めに必要と言ふのみでなく、現や支那人の為め、東亜の為に「信仰は大切」！／斯の大生命の救はれん事の祈に醒めざる者は＝語るにたらざる者＝無自覚者である、又新体制の意味に添ひ得ざる利己主義であり、単なる我田引水流の宗教根性の外でない。日本の**キリスト**教は向上の段階に飛躍しつゝある／新生命は昇つて来た、宜敷く古きカラを破りて翼を得よ。新しき酒は新しき皮袋が必要である。蛾としての世界は、今迄もたざる全く新しい翼と言ふ＝生命の原理＝が必要である。誰ぞ古き巢の中に利己信仰の夢見るは！／新天地に勇飛する翼を持つて指導する光力を有せざれば、宗教は空間にをいてきぼりを喰ふであらう＝空間に放りあげられて、威張た処で所詮は独善であり＝無用の長物である、然れど翼を否定する者は、新生命には死者となる／○雨、一と雨ごとに涼しくなる、月光が冴ゆる、虫はすだく、然しながら、私は愛する夏を惜む……夏よ夏よ……オー夏よ、汝の朝は如何によかりしか汝の昼は強かりしも、汝の夕は如何に詩的にやさしかりしか。我は夏を愛す／○なつかしき北十字星座を仰いで、見晴しよき納涼台に過す一、二時間は身も心も全く浄化し尽くさるゝ想ひがする、船の灯、漁火のかぶり、魚の飛ぶ音、磯の汐ざい、かうした一切を戸外にしめだして、火桶にク

スブル時になった。／○現や新体制組織問題で全国全機構が変改だ、立て直した、等々と駿いでゐる。本誌が発送される日は一ヶ月後だから、其頃は如何に動いてゐるか？
 ／代用食の「うどん」も一入に味もよく、食慾も盛になつてゐるであらう。／○何もかも脱ぎすてゝ、彼の発病当時の如く、山奥の庵に籠りて＝聖書一冊、ペン一本、小鍋一個＝そして神の啓示と祈り心とを四方の友に送るのみで＝静かに瞑想の余生がをくり度いやうな気もする……！／○暗と言ふ字が新聞雑誌に賑かである、暗の勢ひ盛なる時は、義光のおほわるゝものである＝物が無いのでない＝本当はない
 ○○国など暗相場も立ち得ない。物が有るから立つが、しかし、今一段の国民精神の自覚を祈る。／○願は会友各位の上に神の御恵み豊かならむ事を祈りつゝ、擱筆いたします」

*** 「報告欄」『靈交』第264号、1940年11月10日**

「一、金式円也、広島市、松原伸青様／一、金式円也、愛媛県、平尾権之助様」

*** 「編輯後記」同前**

「○秋冷の候、麦飯の味ことによろしく、食慾旺盛、五、六杯は傾け申候。何と気持の良きハガキであらう。おハガキ拝見銃後の固め、誠に心強く存じ候。と返事を記して……窓に迫る深き蒼空を改めて仰ぎつゝ、朗に笑ひました。／○秋冷の候と挨拶して居る内にも病者は「朝夕は寒さを覚え冬来りぬと存ぜられ候」と書きたくなつた。愛する夏は早くも何処へかいつた＝時の流れの速かなるに今更ながら驚く＝のである、噫、わが頭上にも霜を置いた！／○発会記念に対しても二十七年、自分の受洗と一ヶ月違いである事を思ふて共に感謝至極である。又、本誌も同歳であるが、何もかも恩寵づくめである／何より不思議なるは、自分の肉体がこの労に能く耐え得られた事である！／○病菌の惨酷なる虫喰みに、全身のみが脳髓までも、眼球までも、牙齒までも崩されつゝある。これで毎日何かと多忙に用ひられて来た、噫、何と言ふ大なる、否、過分の恩恵であらうか……この罪の子を斯く迄も憐み給ふとは！／○二十七年の間に＝祈りの友＝は全国に渡りて多くの「救霊」を拝した。こゝに不思議

な事には、病む人よりも壮健な人が多く導かされた事実である。神は世の愚なる者、小さき者を用ひ給ふて、健かなる者を救ひ給ふか？／○名古屋の合掌社の求めによりて「楓の下蔭」と題した救癩読本を記して送稿した＝現在迄の癩に関する事は残る処なく記した＝感想文態ではあるが、癩史への文献として価値を将来につなぎ得ると思つてゐる、御期待を乞ふ／○癩床哲学として癩者の觀念した「社会観」、「民族観」、「宗教観」、「倫理観」、「人生観」、等を系統的に記して見たいと思つてゐるが、これに着手すれば間もなく倒れるかも知れないと体力を憂ひてゐるのである。／○その内に誰かシツクリと斯る大事業に精進する病友が起て呉るかも知れない＝我らも志あらば大事業はいくらでもある＝と自分は考へてゐる！／然し、斯る事業は参考資料も入る、滋養も入るので、是らに可能性を失ふ……。／○何に限らず、我ら病者の事業はリレー式に幾代もつがねば成功せない、短命であるから。靈交会にしても後に立つ信者達が更に熱心でなくては神の栄えは押し上げられないと思ふ、故に小人数にても熱信なる友の加へられん事／○大島の全病友は人数も増加したし又、生活（日常の態度）も益々健全に精神的にも一般に向上して敬服の外はない。開所当時の事を思ふと別世界の如き感がある。然し、根拠の点を考へると、決して油断は出来ないのである！／○一見して＝キリスト信者に何の特徴ありや＝と言ひ得るやうであるが、「この根拠の一点に於て」重大なる立場にある事を自覚さゝれて祈るものである。塩は少量にして全部の味に大なる使命を負ふものであるから……。／○本誌また斯る意味に於て「ペン報国」として他にゆずらない＝特徴を有して居る＝ことを認められて居るものである。／然し、我らは甚だ愚弱なれば、神と大方各位との御導を願ふや切であります！／○事あるも事なきも、御皇恩にこたへ奉るべく＝神の子としての本分に尽したい＝ものと祈り碎けてゐる次第であります。／此上とも各位の御加禱と御導きとを頂き、有終の美をいたさして頂きたい！／○何と申しても三十二年余り、島より一步も踏み出さない＝井中の蛙も同じ自分のこと＝移り行く社会の人々に果して参考とも成り得るか疑しいのであるが、神の導に絶対信賴して今後も精進いたし

度いと祈つて居ます。／○次号は「くりすます号」であるが、時局柄 ― 実質的に
お祝ひ致し ― ませう。家庭的に力強くお祝ひして未信者を招待し、軍人の遺家族を慰
めるなど、日本的に ― 静かに意味深く ― クリスト者の美を発揚いたしませう…
…！／○会創立二十六周年の記念号を是にて擱筆いたします。／向冬の折柄、会友各
位の御清福を祈り上げます。／（全完）」

会計係「報告欄」『靈交』第265号、1940年12月10日

「一、金壱円也、広島市、中上悟様／一、金壱円也、大島、東門美代様／一、金五円也、
徳島県、佐々忠兵衛様／一、金壱円也、愛媛県、棟田重太郎様／右、有難く受納致し
ました、尚十一月号の本欄の「島根県の松原様」を広島県と誤記してある事を印刷後
に気附きました、御詫して訂正致します。会計係」

*「編輯後記」同前

「○くりすますお芽出度うござゐます、今年は先づ家庭的にお祝ひ致し、その歓びと
祈りとを集めて教会礼拝を挙行いたし。日本的に祭事をなして教化上に益し度いもの
と存じられます。基督教祭事にも新らしき工夫を要します。／○受洗志願者が四名あ
りまして、準備致して居ります。決して進めるべき事ではない、自ら神に向ふ熱心
によりて乞ひ求むべき事であります。故に自分は準備はするが、決して進めはせないの
であります。心の割礼こそと祈ります／○エリクソン師が帰国なさるのは甚だ名残り
惜く存じます。／日本基督者の一大飛躍により、長い御世話を謝しつつ、送るのは淋
しい内にも共に明るいものを感じますが、一面に国際上の事は誠に塞心に存じます。
／○靈交会も陣容を新しくし、我らの代表石本兄を中心にして大いに向上を計り、こ
の国家の難局に即応して、相分応の御奉公に一段の活躍を致し度いと祈り伏して居
ります。私共に残されし使命に全く献身致したいと存じてゐます／○本誌小さしと言へ
ども、神の器として福音の光明を以て ― 同胞の心霊の救ひの為め ― に全勢力を注
ぎ、以て報国の念を今迄より以上に尽し、**キリスト**の栄光を崇め度いものと祈つて止
みません。各位の御加禱を願ひ上げます／○聖書の研究に、病友の救霊、に病童の宗

教的指導に、諸種の祈禱の使命に、会員特に青年信徒の奮起を祈るものであります。又、経済的にも一段と祈求めねばならなくなるであらう事と存じられます。／○何事も神の御愛を確信して、折角日本信徒として外国の援助より全く独立し得た光栄を全く致して頂き度いものと存じます。／此際、特に会友各依の御指宝を願ふや切であります。／○靈交誌は、幸ひ今日迄「救癩上及一般病床にある同胞に又逆境に悩める人」に貢献する処あり。更に有志をして、滅私奉公に奮起する導火線として用ひられし事は甚少であります。感謝状に励まされて参りました。／○今後も何卒、斯く活用さるゝにフサワシキものとして、聖霊の御導きを祈りつゝ — この意義一入深き年のクリスマス — を迎へて、祝ひ、讚美し、希望とペンとを新しくして立つ者であります、「求めよ与へられん」と信じます／○秋も末になつた。雲の行きかひも、潮の色彩も、何時となく冬来るとの感を誘ふものがある。ハラハラと散る枯葉を浴びて、絶えだえの虫の音を聞く夕など、ものゝ哀愁を思はれて我が身の回顧に故郷の事がヒタ恋しく想ふ！／○晴れ切つた蒼空を、編隊で行く飛行機を仰ぐと、聖戦幾春秋の将兵の労苦が偲ばれ、靖国神社の英魂と遺族の上に涙の祈りが湧いて来る。／遙に思ひは伸びて歐洲各国をめぐり、皇国の民と生れしを深く感謝する！／○病床参拾余年、症状の重りゆきて、全身変形せざる個所なし。しかも自分を怠れ勝ちに「神への祈り一つに活かさるゝ」事を今更不思議に思ふ！／麻痺した不自由な身に寒気と闘ふ事を思ふて、ジツト大空をながめる。／○我が人生は大苦闘の連続であるが、**キリスト**の恵は豊かである！／救はれし幸福を、つくづくと思はれて心魂は喜びに躍るのである！／こゝにのみ、伝へざるを得ない福音の証言がある！／○庭に育ちし一株の菊花五百輪、見事に香つてゐる。／恐れ多いことながら、御皇室の御仁慈を思ひ返して、シバシ菊に立つ……。／日本人の精神の中心、尽忠報国は実に無比の、御皇室に基する！／○過日、京都ナザレン教会の喜田川広先生より、在米同胞の本間夫人よりのプレゼントを頂いた。小さい証言を通じて遠い同胞を励し得た事を知りて、感謝であつた。神の御恵み、意外な処に迄も用ひ給ひしは、勇氣付けられました。／○時雨気味の秋雨が降る。老

松の梢に風見えて海鳴りが聞こゆる。／クリスマス号も無事に生れたと思ふとホツト心安さが充ちて来る。／雑誌編輯する者のみの知る喜びと感謝と満足であらう……。／○各位の御清福を祈りつゝ、擱筆いたします。では、又来年に、サヤウナラ」

Oshima_kin'ei 2011 ～ ～ ～ 大島近影 2011

瀬戸内国際芸術祭 2010（以下、芸術祭、と略記）の会場となった大島には、3つの展示があり、そのうちの1つがかつての面会人宿泊所を少し改造したカフェ・シヨルだった。部屋の仕切りをとりはらい1室となったカフェは、小学校で使われていた木の椅子などが運び込まれ、季節によって心地よい風のおおる歓談の場所となった。芸術祭閉幕後も毎月1回、カフェ・シヨルは営業しているようだ。

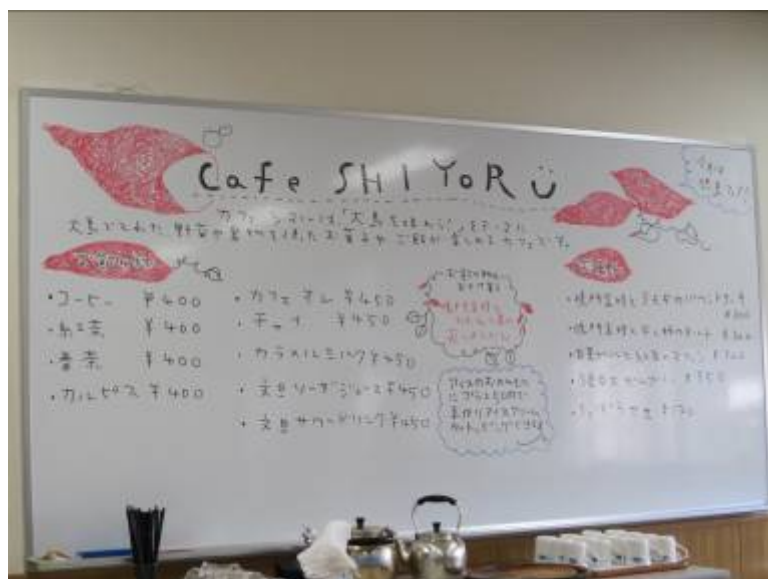
メニューが毎回かわる。在園者が耕作する畑でとれた季節の野菜や果物を活かしている。料理の味もどんどんよくなっている。最初のころはだめだったというのではない。工夫の凝らされようがうまくなっている。

2011年11月のメニューを示そう。「徳島フェア」ということで、鳴門金時をつかったお菓子がでた——「鳴門金時と干し柿のタルトケーキ」「鳴門金時とヨモギのパウンドケーキ」「紅茶と甘夏ピールのマフィン」、そして定番となった「ろっぼうやき」。また、在園者のつくった野菜や果物は、ほうれん草が食パンに、干し柿がケーキに、玉ねぎはタルタルソースとマリネ、かぼちゃは蒸し羊羹と白玉団子、大根は干してミネストローネになる。ランチメニューのAが「ライ麦パンのサーモンチーズサンドプレート」で、Bが「ホウレン草パンのクロックムッシュプレート」。

大島会館に店を移すときもある。その名は、「出張シヨル」となる。ランチメニューのない、ドリンクとお菓子のカフェだ。土日のカフェ・シヨルは、外来者のほうが多い。常連となった客もいるようだ。出張シヨルは在園者の憩いの場となっている。カフェ・シヨルにあまり在園者の姿をみないのは、かつての面宿（在園者たちは面会人宿泊所

を略してよぶ)にはよい思い出がなく、そこにあがりたくないからかもしれないし、古い建物だからバリアフリーになっていないためにあがりづらいからかもしれない。出張シヨルには、看護師や介護士とともに(わたしにはこの両者を見わけられない)、車椅子のままで入ることができる。園内の通りでふだんみかけないひとも、出張シヨルにはでかけてくるようにみえた。連れだってくるひとも、ひとりでひょっこりという感じでくるひともいる。

出張シヨルは、芸術祭のとても優れた成果だとおもう。(2011年12月30日附記)



(左：カフェ・シヨルのメニューボード)

(右：出張シヨルのメニューボード)



(左：ランチ A ライ麦パンのサーモンチーズサンドプレート)

(右：ランチ B ホウレン草パンのクロックムッシュプレート)



(上段左：かぼちゃの蒸し羊羹、上段右：鳴門金時と干し柿のタルト)

(下段左：鳴門金時とヨモギのパウンドケーキ、下段右：定番のろっぼうやき)